

【実践報告】

西原町・那覇市における生活困窮者への学生教員協働の健康支援活動 —— チーム・ガッキーの活動から ——

溝口 広紀, 稲垣 絹代, 野原 萌

Student and Teacher Collaboration on Health Support Activities for People in Need in Nishihara Town and Naha City: The Activities of Team Gakky

MIZOGUCHI Hiroki, INAGAKI Kinuyo, NOHARA Moe

I. はじめに

我が国はバブル期の地価高騰を背景に、低所得者である高齢者のアパート立ち退き問題が生じ、1990年代のホームレス問題の引き金となった(尾島, 2001)。2002(平成14)年にホームレスの自立の支援等に関する特別措置法の施行により、厚生労働省によってホームレスの実態に関する全国調査が毎年実施されている。この調査結果によると我が国におけるホームレス者数は2003(平成15)年調査開始時の25,296名で最も多く、その後減少して2019年には4,555名(男性4,253名, 女性171名, 不明131名)となっている(厚生労働省, 2008, 2013, 2018, 2019)。ただし、この調査は各市町村の担当者による目視調査であり、正確な数を反映しているとは言い難く数値の解釈には注意が必要である。また、完全失業率は2002年が最も高く5.4%, 2019年には2.4%と改善を認めていた(総務省統計局, 2019, 2020)。しかし、新型コロナウイルス感染症の感染拡大等を背景に2020年の完全失業率は上昇傾向となり、4月には2.6%(総務省統計局, 2020)となっていることから、今後のホームレス者数の増加が懸念される。

沖縄県においては、2003(平成15)年のホームレス者数は158名であったが、2019年には58名まで減少している(厚生労働省, 2019)。しかし、2019年の新型コロナウイルス感染症拡大なども影響して2019年12月は2.5%であった完全失業率(沖縄県, 2019)は、2020年3月には2.9%となっている(沖縄県, 2020)ことから、全国と同様の変化が起きている。

ホームレスなどの多くは、保険料の支払いが困難であることなどから国民健康保険などの社会保障制度の恩恵

を受けることができない現状にあり、体調を崩したり、持病などの健康課題を抱えていても病院受診・治療から遠ざかってしまっている。このような現状から国内各地において、ホームレスなどを対象にした健康チェック・健康相談活動が実施されていた(白井, 佐々木, 井上, 稲垣, 2014)。名桜大学看護学科においては、学生と教員が協働して、ホームレスや生活困窮者の入所施設や公園などで健康チェック・健康相談活動を行ってきた。

本稿では、2009年から継続しているホームレスや生活困窮者を対象とした健康支援活動(以下、チーム・ガッキー)のこれまでの活動実践と課題について報告する。

II. チーム・ガッキーの活動

1. 活動の目的と内容

チーム・ガッキーは、ホームレスや生活困窮者などの健康支援を目的に、2009年11月から学生と教員が協働で開始した活動組織である。

チーム・ガッキーの活動は、西原町・那覇市でホームレスや生活困窮者が入所されているNPO法人の施設を訪問し、入所者を対象に健康チェック(血圧・脈拍・体温・経皮的動脈血酸素飽和度・体重・体脂肪率・血管年齢・握力などの測定)および健康相談を4~6回/年実施してきた。さらに、2009年から2016年まで同法人が那覇市の公園において生活困窮者を対象に炊き出しを実施しており、その横で健康チェック・健康相談活動を実施していた。2020年7月からは、同公園において別組織の労働組合が実施している炊き出しの横で、参加者を対象に健康チェック(体温・血圧・脈拍・経皮的動脈血酸素飽和度の測定)を実施している。

2. 活動の流れ

1) 参加学生の募集

チーム・ガッキーは、本学の学生ボランティアサークル「The Volunteer Activity Group (以下、VAG)」に属している。毎回の活動に向けてVAGの会員や看護学科の学生を対象に参加者を募っている学生主体の活動である。1回あたりの参加人数は、学生6～10名と教員1～2名であり、参加学生の約半数は継続して活動を行っている。

2) 事前準備

学生は、チーム・ガッキーの活動数日前の昼休憩に集まり、学生の人数に応じて役割分担(受付・誘導：1～2名、血圧・脈拍・経皮的動脈血酸素飽和度の測定：2名、体重・体脂肪率測定：1～2名、血管年齢測定：1～2名、握力測定：1～2名)と使用する物品の動作確認等を行っている。

各役割は、測定に慣れている2～4年次と、測定に慣れていない学生や1年次をペアで配置するようにして、学生同士で機材の使用法や結果説明の方法を確認している。

3) 健康チェック

当日は、施設のテーブルや椅子を借用し、健康チェックを行いやすいようにレイアウトを工夫しながら実施している。また、受付および誘導、測定を学生が主体的に実施しており、測定の時や待ち時間には積極的にコミュニケーションをとり、入所者の生活や既往歴などの情報を収集しながら実施している。そして、健康チェックの中で基準値から外れている入所者や症状があり、気になる入所者については、教員や保健師課程の上級生に相談して、健康相談につないでいる。

4) 健康相談

健康相談は、教員が主に担っているが、保健師課程の4年次学生がいる際には、大学で学んだ知識を用いて、学生と教員と一緒に健康相談を行っている。また、保健師課程の3年次学生がいる際には、教員がどのように健康相談を実施しているのかを見学する機会となっている。入所者からの主な相談内容としては、高血圧の改善や睡眠、運動に関するものである。

3. 2018年度および2019年度の活動の振り返りと課題

チーム・ガッキーの活動は、4～6回/年実施されており、1回あたり平均24名の入所者が健康チェックおよび健康相談に参加していた(表1参照)。筆者は学生として2009年から2012年3月まで活動に参加しており、本学の教員として2018年4月から活動を再開した。そのため、2018年度および2019年度の振り返りを本学の報告書より抜粋し以下に示す。

1) 2018年度

健康チェックを行う中で、血圧が高い、または自覚症状がある入所者の中で、病院受診により精密検査が必要なケースについては、本人もしくは施設責任者に情報共有を行い、血圧の定期的な測定と数値のモニタリングや、症状悪化時には直ちに病院受診するよう指導を行った。また、健康の維持・増進に向け、入所者に個別で運動指導を行ったが、その後チーム・ガッキーの活動への参加がなく、評価が困難であった。個別での指導では継続的なフォローが困難であるため、施設入所者全体や施設責任者を巻き込んだ取り組みの検討が必要であった。

2) 2019年度

運動指導については、入所者の生活習慣や筋力などか

表1. 健康チェック・健康相談に参加した入所者数と学生数(2020年10月現在)

	A施設での参加者数	B施設での参加者数	公園	参加者(合計)	学生数	教員数	実施回数
2018年4月	17	27		44	15	2	
2018年6月	17	20		39	8	2	
2018年8月	15	7		22	7	2	5
2018年10月	11	11		22	5	2	
2018年12月	15	5		20	6	2	
2019年2月	6	16		22	5	2	
2019年4月	10	10		20	10	1	
2019年6月	7	9		16	9	1	6
2019年10月	8	8		16	8	1	
2019年11月	14	9		23	9	1	
2020年2月	9	6		15	8	1	
2020年7月			12	12	3	1	2
2020年10月			18	18	4	1	
平均	11.7	11.6	12.0	22.2	7.5		

ら実現可能なものを選択して提案を行い、運動を継続されている入所者もいた。さらに、毎回の訪問による活動を楽しみにされている入所者もあり、健康の維持・増進に対して意欲的な発言も見られた。

学生とともに本活動を行うことで、入所者の健康への意識および行動変容につながっており、活動を継続していく意義は大きい。

学生の感想としては、「測定して終わりではなく、コミュニケーションをとりながらアドバイスを少しずつできるようになりたい」、「血圧の測定結果から、高値となる原因について入所者や下級生にうまく説明することができず、今後の学習課題に気付けた」などの振り返りを行っていた。

III. 考察

1. 学生の学び

チーム・ガッキーの活動は、看護学生が主体的にホームレスや生活困窮者の健康支援を実施する、県内では唯一の活動であり、全国的に見ても貴重である。学生は大学の講義・演習、さらには実習で修得した健康チェックのスキルや病気に関する知識およびコミュニケーション能力を結び付けて、より看護現場での実践に近い経験をしている。また、本活動では1～4年次の学生が参加しているため上級生やこれまでに経験している学生が、下級生や経験したことがない学生に知識の提供や技術指導を行うことで、学年問わず相互に学び、成長する機会となっている。岩本、須田、柴山、高橋、飛世（2015）は、地域住民への健康支援により、学生は学内で学んだことの実践とそれに伴う効果を実感したことで、学習の意義と看護のやりがいの再認識につながり、看護学生としての達成感を得たとの結果を示している。チーム・ガッキーの活動は学生間で相互に学び、かつ学生が学んだことを生かし達成感と自信を得られる場となっている。

2. 壁を取り払った支援

チーム・ガッキーの継続的な活動による入所者の反応としては、自身の行動変容に前向きになっている入所者もいることから、今後も継続した活動への期待が窺える。しかし、活動時間帯に仕事のため不在の入所者もあり、継続して参加している入所者が限られている現状にある。特に運動を取り入れるなどの生活習慣の改善や健康課題のある入所者の継続参加が少なく、チーム・ガッキーのこれまでの活動の継続のみではフォローが困難である現状も明らかとなっている。

白井、蒔田、佐々木（2019）は、野宿生活者が自覚症状を認めても受診行動をとらない理由として、他者との

つながりがいないこと、自暴自棄になっていることがあると報告しており、チーム・ガッキーの活動においても支援の壁となっていると考える。

奥田、稲月、垣田、堤（2014）によると、生活困窮者は経済的困窮と社会的孤立の複合状態に置かれた人々のことだと定義している。そして社会的孤立は困ったときに支えてくれる互助的なセーフティネットの喪失を意味するとし、この社会関係の喪失がひいては生きることへの意欲の喪失へとつながると述べている。健康課題を抱える本活動の入所者もまた同様の状態と言え、生活保護などの経済的支援に加え生への意欲を向上するような内的支援もまた健康課題を改善し、健康的な生活を送るためには必要である。また、奥田ら（2014）はそのような生活困窮者には「伴走型支援」を必要とし、「ともかく共にいること」を第一義としている。このような伴走型支援ができるのは施設の職員と一緒に生活を送る入居者であり、本活動は彼らを支えるために助言やフォローなどができるのではないかと考える。そのため、今後は、チーム・ガッキーのこれまでの活動のみではなく、施設全体の健康意識を向上させ、自身の生活習慣の見直しや継続的な運動を取り入れるなど施設に介入をし、生活習慣の改善につなげる方策の検討が必要である。

3. コロナ禍における支援のあり方

新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、東京では職場の休業による減収や雇止め、解雇などにより生活が困窮した結果、賃貸住宅の家賃滞納や住宅ローン破綻により、住む所を失う非正規労働者が急増する可能性が指摘されている（稲葉、2020）。沖縄県においても離職率が上昇していることから、ホームレス者数の増加が懸念されている。そのため、チーム・ガッキーでは新型コロナウイルス感染症対策を十分に実施したうえで、那覇市の公園において健康チェックを実施している。入所者はこれまでの活動と異なるが、この場においても健康課題を持つ入所者に対して継続的な支援を摸索していく必要があると考える。以前は、看護の中心は病院であったが、入院患者だけでなく、地域の生活者を含めた看護を実践できる人材が求められている。地域の片隅で生活するホームレスや生活困窮者への健康支援もまた看護職の責務である。講義や演習、実習では学ぶことができないことを、現場で学ぶ機会となり得るチーム・ガッキーの活動を今後も継続していきたいと考える。また、野宿生活者は不衛生な生活環境にあることや、十分に食事をとることが出来ず栄養の偏りや低栄養状態にあることから、感染症に罹患しやすいことが報告されている（白井ら、2019）。チーム・ガッキーの活動は、感染対策を実施しながら生活困窮者の健康チェックを行っており、その中

で健康状態に異常がある方を迅速に医療機関につなげることができることから、那覇市の感染拡大防止に貢献できているのではないかと考える。

IV. 今後の課題

今後は施設全体の健康意識を向上させ、入所者自身の生活習慣の見直しや継続的な運動を取り入れるなどの生活習慣の改善につなげる方策の検討を行い、チーム・ガッキーの活動に取り入れていくことが課題である。また、新型コロナウイルス感染拡大のため活動の場が変わった現在においても、健康課題のある入所者への健康チェックと健康支援を行い、ともに寄り添いながら入所者と一緒に健康課題を解決していく方策を摸索していく必要がある。さらに、行政機関や医療機関と連携して、チーム・ガッキーの活動を行っていくことで、医療機関の受診につながりにくい生活困窮者への健康を支援していくことが今後望まれる。

引用文献

- 稲葉剛 (2020) : ホームレス・クライシスに立ち向かう, 世界, 9, 41-51.
- 岩本里美, 須田恭子, 柴山祐子, 他 (2015) : 多職種とのCollaborationによる地域住民への健康支援—参加学生と企画者による評価—, 保健福祉学部紀要, 7, 79-84.
- 公立大学法人名桜大学 (2019) : 平成30年度年次報告, 地域連携機構 健康・長寿サポートセンター 看護実践教育研究センター, 78.
- 公立大学法人名桜大学 (2020) : 平成31年度年次報告, 地域連携機構 健康・長寿サポートセンター 看護実践教育研究センター, 未発行.
- 厚生労働省 (2003) : ホームレスの実態に関する全国調査報告書の概要, 2020年5月31日, https://www.jil.go.jp/jil/kisya/syaengo/20030326_01_sye/20030326_01_sye.html
- 厚生労働省 (2008) : ホームレスの実態に関する全国調査(概数調査)結果(平成20年4月), 2020年5月31日, <https://www.mhlw.go.jp/bunya/seikatsuhogo/homeless06/>
- 厚生労働省 (2013) : ホームレスの実態に関する全国調査(概数調査)結果, 2020年5月31日.
- 厚生労働省(2018) : ホームレスの実態に関する全国調査(概数調査)結果, 2020年5月31日.
- 厚生労働省 (2019) : ホームレスの実態に関する全国調査(概数調査)結果について, 2020年5月30日, https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_04461.html

- 沖縄県 (2019) : 令和元年12月の雇用状況, 2020年5月30日, <https://www.pref.okinawa.jp/site/shoko/koyo/kikaku/toukei/h24/r01-12.html>
- 沖縄県 (2020) : 令和2年3月の雇用状況, 2020年5月30日, <https://www.pref.okinawa.jp/site/shoko/koyo/kikaku/toukei/h24/r02-03.html>
- 奥田知志, 稲月正, 垣田裕介, 他 (2014) : 生活困窮者への伴走型支援—経済的困窮と社会的孤立に対応するトータルサポート, 明石書店, 東京.
- 尾島豊 (2001) : 1990年代におけるホームレス問題の動向と論点—関連文献の考察をもとに—, 長野県短期大学紀要, 56, 41-55.
- 白井裕子, 佐々木裕子, 井上清美, 他 (2014) : 野宿生活の人々との関わりから一名古屋, 大阪, 沖縄での健康相談, 保健師ジャーナル, 70(3), 222-227.
- 白井裕子, 蒔田寛子, 佐々木裕子 (2019) : 症例報告からみる野宿生活者が罹患しやすい疾患の特徴と受診に至る経緯についての文献検討, 豊橋創造大学紀要, 23, 31-44.
- 総務省統計局 (2019) : 労働力調査 長期時系列データ, 2020年5月30日, <https://www.stat.go.jp/data/roudou/longtime/03roudou.html>
- 総務省統計局 (2020) : 労働力調査(基本集計) 2020年(令和2年)4月分結果, 2020年5月30日, <https://www.stat.go.jp/data/roudou/sokuhou/tsuki/index.html>